

疊敷設

〔類聚名物考 調度四〕あげだ、み。

貴人の御座所又は寢所には、疊の上にもた疊をかさねて敷を上疊といふ、

〔日本書紀神代〕彦火火出見尊就其樹下、徒倚彷徨良久有一美人排闥而出、略乃驚而還入自其父

母曰、有一希客者在門前樹下、海神於是鋪設八重席、薦以延內之、

〔日本書紀通證七〕釋曰、今新嘗祭、神今食、神態之時、設八重疊爲神座也、兼夏曰、禮天子之席五重、此曰、席薦重也、○下略

也、○下略

〔類聚名物考 調度四〕八重疊 やへだ、み

八の意にてた、ね重なりもとより疊は菰藁をた、みかさねてさしたる物なれば、八重とは

いふ也、この物今世には、八角にして縁付たる物にて、神拜などにも用るとおぼえしは辟

ことなり、

〔古事記上〕爾海神自出見云、此人者天津日高之御子、虚空津日高矣、即於內率入而美智皮之疊敷八

重亦純疊八重敷其上、坐其上而具百取机代物爲御饗、

〔類聚名物考 調度四〕きぬのた、み 純疊 純は和名抄にあしぎぬと訓り、

地の太き絹也、古事記に、下に海驢皮の疊をしき、上にこの疊敷と見えたれど、是は茵の如きも

のをいふ歟、

〔古事記神武〕後其伊須氣余理比賣參入宮内之時、天皇御歌曰、阿斯波良能志シケ去岐コキ袁夜ヤニ邇須賀多

多美伊夜佐夜斯岐氏和賀布多理泥斯、

〔古事記景行〕爾其后名弟橘比賣命白之、妾易御子而入海中、御子者所遣之政遂應覆奏、將入海時、以

菅疊八重皮疊八重純疊八重敷于波上而下座其上、略自其幸行而到能煩野之時、略又歌曰、伊

能知能麻多祁牟比登波多多美許母幣具理能夜麻能久麻加志賀波袁宇受爾佐勢曾能古此歌者